

古典研究会 研究発表

連載

是為論これ ろん な～是を論と為す～⑧

『太極拳譜』まとめ (その4)

前月号まで『太極拳譜』発見の経緯や4文献の内容について解説してきました。今回の発表は『太極拳譜』まとめの結びの回とし、『太極拳譜』に関わった主要人物たちにスポットを当て、理論がどのように継承されていったかを見ていきます。

『太極拳譜』を重視し、最初に研究したのは武禹襄(武式太極拳の始祖)です。兄の武澄清が赴任先の河南省舞陽県で発見した拳譜を受け継いだ武禹襄は、実技としての拳術を学ぶ一方で、理論研究にも心血を注ぎ、理論研究に多大な貢献がありました。また兄の武澄清も原典を研究し、複数の文献を書き残しています。

武禹襄一家は河北省永年県の由緒ある家柄で、武禹襄含む三兄弟は、学問や武術の素養があったといわれています。

同郷の楊露禪(楊式太極拳の始祖)は、彼らに拳術を指導した時期があると考えられています。その楊露禪は幼少の頃から、葉問屋太和堂に奉公していましたが、帰郷する主人について陳家溝へ行き、陳長興(陳式太極拳の伝人)の門下となり拳術を修業し

ました。成人して、後に北京へ出てからは軍部において指南役を務め、武術の試合を通して名声を得ました。その技は息子たち(楊班侯・楊健侯)が受け継ぎました。

楊班侯と楊健侯は武禹襄から学問を学んだそうです。楊親子と武禹襄が知恵と技術を提供し合う関係だったことが分かります。武禹襄はその後、趙堡鎮(陳家溝近く)の陳清萍(陳式太極拳の伝人)からも拳術を学びました。

実技と理論の両面から拳術を追求した武禹襄は1880年に亡くなりましたが、その後も、武禹襄の甥で弟子の李亦畬は、師の教えを基に自らも理論研究にいそしみました。そして『太極拳譜』発見から約30年後、その内容を中心とした3冊の要訣集(「老三本」と呼ばれている)を記しました。

うち1冊は李亦畬本人の蔵書「自蔵本」であり、残りの2冊については、李亦畬の弟子である郝為真(郝和)から、その息子たちへと代々受け継がれた「郝和本」、そして、李亦畬の弟である李啓軒に渡った「啓軒本」です。

当時は武術の技と拳理は秘伝とされる傾向にあったことなどから『太極拳譜』は長い間、世間にその存在が知られていませんでしたが、1930年代に李啓軒の孫の李福蔭によって公に出版され、『太極拳譜』が広く世間に知れ渡ることとなりました。

現在の太極拳の分野では、陳式・楊式・武式・呉式・孫式が五大流派とみなされています。

李亦畬の弟子郝為真は、後に孫禄堂を指導し、そのことが孫式太極拳の誕生に繋がりました。また楊露禪とその息子楊班侯は全佑に武術を教え、後の呉式太極拳へと繋がっていったのです。

師弟関係や親縁関係による伝承、とりわけ楊露禪親子の活躍がきっかけで拳術の技が伝わり、また一方では、武禹襄とその弟子など知識階級にあった武術家たちの研究により、理論面も大きく発展しました。このような流れのなかで、今日のような理論と実技を両輪として習得していく太極拳の学びのスタイルが構築されていったと考えられます。

